

## 世界一からの転落

世界一からの転落といっても、オリンピックのメダル争いの事ではありません。女性の2011年の平均寿命が27年ぶりに世界1位の座を香港に明け渡し、世界第2位となった事について考えてみたいと思います。

これは、厚生労働省が7月26日に発表した「簡易生命表」で明らかになったものです。

この「簡易生命表」は、厚生労働省によると「日本にいる日本人について、1年間の死亡状況が変化しないと仮定したときに、各年齢の人が1年以内に死亡する確率や平均してあと何年生きられるかという期待値などを死亡率や平均余命などの指標（生命関数）によって表したもの」とされています。また、0歳の平均余命は、「平均寿命」として広く活用されています。

さて、2011年の日本人の平均寿命はといいますと

女性 85.9歳（対前年▲0.4歳）

男性 79.44歳（対前年▲0.11歳）

となっています。

ちなみに、世界一になったのは、男女共に香港で

女性86.7歳

男性80.5歳

となっていますが、日本の女性85歳、男性79歳というのも立派なもので、世界1位の座を明け渡したとて何のことがありましょう。

とはいえ、どうして平均寿命が下がったのかは気になるところです。

厚生労働省によると、平均寿命の前年との差について「男女とも悪性新生物、脳血管疾患などの死亡率の変化が平均寿命を延ばす方向に働いているが、不慮の事故、肺炎などの死亡率の変化が平均寿命を減少させる方向に働いている。特に、不慮の事故の再掲である地震による死亡率の変化が大きく影響している。」と分析しています。昨年の東日本大震災はこういうところにも大きな影響を与えているのですね。

さて、人には寿命があり、いずれこの世ともお別れしなければなりません。

この宿命からは如何なる人も逃れることは出来ません。

人生50年とっていた時代からすると、現代人は長生きになりましたが、それでも、100歳を超える人は稀であり、中でも、自立して元気で生活している方は極めて少ないのが現状です。

そんな中で、多くの人が願っているのはPKO、即ち

P（ぴんぴん元気で）

K（ころりと）

O（往生）

という事だと思えます。

「長生きしたい」というのは当然ですが、それ以上に、「より良く生きたい」というのが人々の共通した思いではないでしょうか。

不老長寿は人類の夢ですから、これからも、衣食住の改善や医学の進歩等によって平均寿命は延びていく可能性があるでしょう。しかし、平均寿命は如何に延びても、実際には平均寿命以上に生きる人もいれば、幼くして亡くなる方もいます。元気なまま突然亡くなる方もいれば、病と闘いながらの一生という人もいます。

どのような一生もその人の一生であり、貴重なものです。だからこそ、「死を迎える直前までその生を全うしたい」と思い、「その生を全うしたい」と思うからこそ、「生涯現役」「死ぬまで元気！」でいたいと、誰しもが願っているのだと思えます。（塾頭 吉田 洋一）